



# 『古今和歌六帖』出典未詳歌注积稿：第六帖(10) 朝顔～葵

著者	福田 智子
雑誌名	社会科学
巻	44
号	4
ページ	35-56
発行年	2015-02-18
権利	同志社大学人文科学研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013877">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013877</a>

『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿

—— 第六帖 (10) 朝顔〜葵 ——

福田 智子

本稿は、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿「第六帖(9) 芹〜青葛」(『社会科学』第四十三巻第四号(通巻一〇一号)、平成二十六年二月)の続編として、『古今和歌六帖』第六帖の「朝顔」から「葵」までの題に配されている出典未詳歌、九首について注釈を施し、表現のあり方を考察したものである。前稿同様、底本には書陵部蔵桂宮本(『新編国歌大観』の底本)を用い、江戸期の流布本である寛文九年(一六六九)版本を含めた九本の伝本の本文異同を視野に入れる。凡例は前稿に詳述しているので、その概略を記すにとどめる。ただし、校異については、前稿では漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は示さなかったが、本稿では、漢字表記や仮名遣いの異なりが解釈と深く関わると思われる箇所が存するため、必要に応じて表記の異同をも掲出する。なお、巻末には、朝顔〜葵の歌(三八九四〜三九五二番)の別出歌一覧を付す。これについての凡例も、前稿を参照されたい。

凡例

一、底本は、宮内庁書陵部蔵桂宮本を用いる。

二、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は原則として示さず、語の異なりのみを示すが、和歌の解釈上、重要と思われる表記の異同は、必要に応じて適宜示す。諸本とその略称は次のとおり。

- 永青文庫蔵北岡文庫本 略称(永)
- 島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫本 略称(松)
- 内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本 略称(和)
- 内閣文庫蔵林羅山旧蔵本 略称(羅)
- 神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本 略称(林)
- 神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本 略称(宮)
- 田林義信氏旧蔵本 略称(田)
- ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本 略称(黒)
- 寛文九年版本 略称(寛)

三、和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。

## 注釈

三八九五（あさがほ）

## 【本文】

おぼつかなたれとかしらん秋霧の絶え間にみゆるあさがほのは  
な

【校異】 ○秋霧―霧（和） ○絶間―た、ま（和）

【語釈】 ○おぼつかかな 形容詞「おぼつかなし」の語幹用法。対象の様子がはっきりせず、つかみどころのないさま。また、そのためにおこる不安な気持を表わす。はっきりせず、気がかりだ。 ○たれとか「たれ」は誰の意。結句の「あさがほ」の花の名から、人の寝起きの顔「朝顔」を連想している。「とか」は、格助詞「と」に係助詞「か」の付いたもの。不確実な想像または伝聞を表わす。文中に用いて文末の語句と呼応する場合と、文末に用いられる場合とがある。当該歌は前者。…というのであるうか。…というわけなのか。 ○あさがほのはな ヒルガオ科の一年草。薬用としては平安時代初期から栽培されていたという。花は早朝開花し、午前中にしぼむ。朝起きたときの顔、寝起きの顔の意を掛け、男女が一晚をともに過ごした翌朝の女性の顔をいうことが多いが、当該歌では、朝顔の花が咲く情景そのものを詠んだと見られる。

## 【通釈】

はっきりしないなあ。いったい誰とわかるのであろうか。秋霧の絶え間に見える朝顔の花は。

## 【他出】

『新勅撰和歌集』卷第四秋歌上、二五一番

（題しらず）

よみ人しらず

おぼつかなたれとかしらむ秋ぎりのたえまに見ゆるあさが  
ほの花

『和漢朗詠集』卷上秋、二九三番

（種）

おぼつかなたれとかしらむあざぎりのたえまにみゆるあさ  
がほのはな

## 【考察】

「此やどの人にもあはで種の花をのみみて我やかへらん」（貫之集・二一〇）という歌からも知れるように、植物の朝顔は、人の寝起きの「朝顔」を連想させる。当該歌は、立ち渡る秋霧の絶え間に、朝顔の花がほのかに見える情景を、秋霧の中に「顔」、すなわち人の気配がすると見立てた歌である。

「あさがほ」は、平安期のものとは異なる花を指す可能性はあるが、早く『万葉集』にも詠まれる。八代集では『後撰集』初出で、『新古今集』には最も多く、三首の歌が見える。次の『新

勅撰集』では、六首と急増する。女性に喩えられることが多く、「君こそは誰に見せましわがやどのかさねにさける槿の花」（拾遺集・秋・よみ人しらず・題しらず）、「我ならでしたひもとくなあさがほのゆふかけまたぬ花にはありとも」（新勅撰集・恋三・八二一・業平朝臣・女のもとよりかへりてつかはしける）などの歌がある。この業平歌のように、朝方に咲き、すぐに萎んでしまう花であることに着目して詠むのも常套で、「山がつかさほにさけるあさがほはしののめならであふよしもなし」（新古今集・秋上・三四四・貫之・題しらず）といった歌が挙げられる。また、「もろともをるともなしに打ちとけて見えにけるかなあさがほの花」（後撰集・恋三七一六・よみ人しらず・あさがほの花まへにありけるさうしより、をとこのあけていで侍りけるに）、「しどけなきねくれたれがみを見せじとやはたかくれたるけさの朝がほ」（小町集・九七）、「かすがののなかのあさがほおもかげにみえつついまもわすられなくに」（伊勢集・四一三）、「しらつゆのいそぎおきつるあさがほのみつともゆめよ人にかたるな」（敦忠集・二二・一条の君のつとめてうへよりおるるにさしむかひたまへれば、をむな）といった、寝起き、あるいは共寝をした翌朝の女性の顔と掛けて詠まれた歌も散見される。当該歌では、このような「あさがほ」のもつ恋歌のイメージを揺曳させながら、霧のかかった中にほのかに咲く、目の前の朝

顔の花を詠んだものと見られよう。なお、他出に示したように、当該歌は後世、『新勅撰集』『和漢朗詠集』に秋歌として採録されている。

「おほつかな」という句は、『万葉集』西本願寺本の訓では五例（二七五・一八九・六八〇（六七七）、一九一三（一九〇九）、二一四三（二一三九）番）あり、いずれも第三句に置かれる。当該歌のように初句に置く例は、勅撰集においては『拾遺集』に、「おほつかな雲のかよひち見てしかなとりのみゆけばあとはかななし」（物名・三八六・かねもり・なとりのみゆ）、「おほつかなくらのまの山の道しらで霞の中にまどふけふかな」（雑春・一〇一六・安法法師・くらまにまうで侍りけるをりに、みちをふみたがへてよみ侍りける）他一首があるのが初出で、他にも「おほつかなかはりやしにしあまのがはとしにひとたびわたるせなれば」（詞花集・秋・八九・大中臣能宣朝臣・寛和二年内裏歌合によめる）、「おほつかな野にも山にも白露のなにごとをかは思ひおくらむ」（新古今集・秋下・四六五・天曆御歌・だいしらず）など、平安中期の例を見出す。また、私家集にも、「おほつかな今としなればおほあさきの森の下草人もかりけり」（貫之集・二四〇・おほたかがりしたる所）、「おほつかなくもれるそらの月なれば心やましきよはにもあるかな」（清正集・八四・いかでとおもひける人にはつかにあひたりけれど、いらへなども

ことにせざりけるに、月もおほるなり」といった例がある。なお、「みぬ人のこひしきやなぞおほつかなたれとかしらむゆめにみゆとも」（左兵衛佐定文歌合・二六・右 躬恒）という歌は、当該歌の初句・第二句と全く同じ句を、第三・四句に有しており、その共通性に留意される。

「おほつかな（し）」が「秋霧」と組み合わせられた例には、『後撰集』所収の「秋霧の立ちぬる時はくらぶ山おほつかなくぞ見え渡りける」（秋中・二七一・紀貫之・延喜御時に、秋歌めしければたてまつりける）、「秋霧のたちしかくせばもみぢばはおほつかなくてちりぬべらなり」（秋下・三九二・つらゆき・題しらず）という貫之歌が二首ある。「秋霧」が立ちこめて辺りを隠す情景は、当該歌にも通じるものがある。

なお、「（秋）霧の絶え間」という表現は、和歌においてはそれほど多くはなく、「……我はただ たもとそほつに 身をなして ふたはるみはる すぐしつづ その秋冬の あさぎりの たえまにだにもと 思ひしを 峯の白雲 よこぎまに たちかはりぬと 見てしかば 身をかぎりとは おもひにき……」（拾遺集・雑下・五七四・東三条太政大臣・円融院御時、大将はなれ侍りてのちひさしくまゐらで、そうせさせ侍りける）、「明けぬるか河瀬の霧のたえ間よりをちかた人の袖のみゆるは」（経信母集・八・七条に、河霧たちわたるあか月、やうやうあくるほど

に、人のゆきかふを見て）などが、比較的早い例である。

また、「おほつかな（し）」と「あさがほ」との組み合わせは、「おほつかなそれかあらぬかあけぐれのそらおほれるあさがほの花」（紫式部集・四・かたがへにわたりたる人の、なまおほおほしきことありて、かへりにけるつとめて、あさがほの花をやるつと）という歌に見えるが、ここの「あさがほ」には、花の名に寝起きの顔を掛けている。

「あさがほ」と「霧」がともに詠まれた歌には、「ねくたれのあさがほの花あさ霧におもがくれて見せぬ君かな」（夫木抄・卷十一・四五七六・読人不知・同〈題不知〉、六二）がある、この歌に記される「六二」は『古今六帖』第二帖を指すかと推察されるが、現存本には未確認である。他にも、源順の歌合の判に、「あさがほもかくれぬ物は秋ぎりのゆたかにたたぬたもととなりけり」（女四宮歌合・二八・左門君・ちくさのかうつる、かへし）という例が見える。「霧」が「あさがほ」を隠す情景は、当時の歌人たちにある程度共有されていたことがわかる。

三九〇三（あさがほ）

【本文】

しぐれのみまなくしふればかすがのあさぢの色もうつるひにけり

【校異】 ○ふれは―ふれと(林) ○まなく―見間なく(宮)

【語釈】 ○しぐれ 主として晩秋から初冬にかけての、降ったりやんだりする小雨。また、そのような曇りがちの空模様をいう。しぐれの雨。植物の葉の色を染めるものとして詠まれる。

○まなくしふれば「まなし」は、絶え間がないこと。また、そのさま。ひっきりなし。「し」は副助詞。「……し……ば」の形で、順接条件句中の用言に続く語に下接する。○かすがの 歌

枕。奈良市、春日山の西側のふもと一帯の原野。現在の奈良公園の付近。若菜、シカ、ツツジの名所。○あさぢ 浅茅。丈が低いチガヤ。秋の到来とともに色付く。○うつろひにけり「うつろふ」は、(植物の葉が)色づく、染まる意。

【通釈】 時雨ばかりが絶え間なく降るので、春日野の浅茅の色も染まっ  
てしまったなあ。

【他出】 なし

【考察】

春日野に生える浅茅に、しとしとと途切れることなく時雨が降り注ぎ、葉が紅葉してしまったところに、季節の移り変わりを実感した歌である。

「しぐれのみ」降るといふ表現は、「かはかみにしぐれのみふるあじろぎはもみぢさへこそおちまさりけれ」(躬恒集・七)、

「もみぢ葉はてりて見ゆれど神無月しぐれのみふるやまぢなりけり」(貫之集・五三三)、「しぐれのみふる山ざとのこのしたはもるひとのみやもらずはあるらん」(寛平御集・二三)、「しぐれのみめにはふれば槇のはもあらそひかねて紅葉しにけり」(人丸集・二八一)といった歌に見える。とくに『人丸集』歌は、紅葉するのは時雨が降り続くことによると捉えている点で、当該歌と共通する。

「まなくしふれば」という句は、『万葉集』に、「しぐれの雨間なくし降れば三笠山木ぬれあまねく色付きにけり」(巻八・一五五七・一五五三・衛門大尉大伴宿祢稻公歌一首)、「しぐれの雨間なくし降れば真木の葉も争ひかねて色付きにけり」(巻十・二二〇〇・二一九六)の二首の歌がある。平安期に入っても用例は少なく、万葉風の表現と見られる。

また、「かすがの」の「あさぢ」も、『万葉集』に、「春日野の浅茅が上に思ふどち遊ぶ今日の日忘らえめやも」(巻十・一八八四・一八八〇・野遊)、「春日野に浅茅標結び絶えめやと我が思ふ人はいや遠長に」(巻十二・三〇六四・三〇五〇)、「春日野の浅茅が原に後れ居て時そともなし我が恋ふらくは」(巻十二・三三二一・三一九六)の三例が見出せるが、その後の用例は稀少である。わずかに、「君にあはんとしをば人にかすが野の浅茅が原にうぐひすぞ啼く」(夫木抄・巻二・四六一・同)読人

不知・同〈題不知〉六帖二の他、式子内親王と藤原為家の歌が見出される程度である。平安中期においては、この地名と景物の組み合わせも、万葉に拠るところであったのであろう。

さらに、「あさぢ」と「しぐれ」も、「我がやどの浅茅色付くよなばりの夏身の上にしぐれ降るらし」(万葉集・巻十・二二一一・二二二〇七)、「百舟の泊つる対馬の浅茅山しぐれの雨にもみたひにけり」(同・巻十五・三七一・九・三六九七)といった万葉歌に詠まれる。これらの歌には、時雨が浅茅を紅葉させるという発想が読み取れる。当該歌はこのように、「あさぢ」を荒れ果てた家の象徴と捉える傾向にある平安中期の和歌とは異なり、時雨が色を染める秋の景物のひとつとして詠む万葉風の作となっている。

三九一二(あぢさゐ)

【本文】

あかねさすひるはこちたしあぢさゐのはなのよひらにあひみて  
しかな

【校異】○うちたしーうちたく(和) こちたし(田・黒・寛)  
うたく(宮) ○よひらにーよひらに(和・林) よひらに(羅・  
田・黒・寛) よひらに(宮) ○あぢさゐーあぢさゐ(「ち」ノ下  
ニ「り」アリ)(永)

【語釈】○あかねさす「昼」に付く枕詞。○こちたし 人の

言葉、うわさなどが多くて、うるさい。わずらわしい。『万葉集』に用例が集中して見られ、平安期の例は少ない。「人言はまことこちたくなりぬともそこに障らむ我にあらなくに」(万葉集・巻十二・二八九九・二八八六)。○あぢさゐのはなのよひら 紫陽花の花弁が四枚あることをいう。「よひら(四枚)」に「よひ(宵)」を掛ける。「よひ」は、「ひる」との対比で用いられている。なお、「ら」は、名詞や代名詞の下に付き、語調を整え、事物をおおよそに示す接尾辞。異文「よことに」だと、毎夜毎夜の意となる。

【通釈】

昼は噂されることがあってわずらわしい。紫陽花の花びらの数、四枚(よひら)にちなんで、宵(よひ)の時に、恋人に逢いたいものだ。

【他出】

『六花和歌集』巻第二夏歌、四四一番

あかねさすひるはこちたし菎のあぢさゐ花のよひらにあひ  
見てしかな

『六花集注』六六番

赤根さすひるはこちたし菎の花のよひらにあひみてしかな

【考察】

「暁が立ちやすく面倒なことになるがちな昼間ではなく、日が暮れた後、宵を迎えた頃に逢瀬を持ちたいという願望を詠んだ歌である。紫陽花の花びらの「四枚（よひら）」に「宵（よひ）」を掛け、「昼」と対比するところに表現上の要点がある。

「あかねさす」「ひる」という表現は、主として『万葉集』に見られ、「……あかねさす 昼はしみらに ぬばたまの 夜はすがらに……」（万葉集・卷十三・三二八四・三二七〇）（万葉集・卷十三・三三一・三二九七）、「あかねさす昼は物思ひぬばたまの夜はすがらに音のみし泣かゆ」（万葉集・卷十五・三七五四・三七三二）、「……あかねさす 昼はしめらに あしひきの八つ峰飛び越え ぬばたまの 夜はすがらに 暁の 月に向かひて……」（万葉集・卷十九・四一九〇・四一六六）、「あかねさす昼は田賜びてぬばたまの夜の暇に摘める芹これ」（万葉集・卷二十・四四七九・四四五五）の五例を数える。『古今六帖』の出典未詳歌にも、他に、「たわすれていをぞねにけるあかねさすひるはさばかり思ひしものを」（古今六帖・第一・二六五・てるひ）という歌があるが、これら以外は、江戸期に下るまで、ほとんど用例を見ない。なお、万葉歌には、いずれも「昼」と「夜」との対比が見られるが、当該歌においても共通するところである。

「あぢさゐ」は、『万葉集』から詠まれているが、「よひら」と

ともに詠み込まれるのは、当該歌がごく初期の例である。後世の用例についても、当該歌の影響下に詠まれていると見られる。この「よひら」という語は、「あぢさゐ」を詠む際に用いられ、それ以外の用例が見当たらないことも付言しておきたい。なお、「あぢさゐ」と異文「よごと」とを組み合わせた例は管見に入らない。

結句「あひみてしかな」は、『万葉集』に用例はなく、勅撰集では『後撰集』が初出である。「よひ」との組み合わせは当該歌以外、見当たらない。一方、「ひる」との組み合わせならば、「なきたむる涙はそでにみつ塩のひるまにだにも相見てしかな」（順集・四八・恋）がある。下句の内容は、当該歌とは全く逆になっているが、「相見」ることを望む時間帯、「ひるま」を掛詞（干る間／昼間）で用いる手法が、当該歌と共通する点に留意される。

三九一五（さこく）

#### 【本文】

秋の野はねこじにこじてもてぬともいはほのたねはのこしやばせぬ

【校異】○秋ーナシ（和） ○こしてーて（宮）○もてぬともー<sup>六イニいぬと</sup>もてぬ共（和・宮）もてぬとも（林・田・黒・寛）



【語釈】○さこく 植物「石斛(せつこく)」の異名。ラン科の常緑多年草で、岩の上や樹上に着生する。○ねこじ 草木を根がついたまま掘り取ること。「天の香山の五百津真賢木を根許士爾許士(ねこじにこじ)て〈許より下の五字は音を以ゐる〉」(古事記・上)。

【通釈】秋の野では、草木を根から掘り取って持って行ったとしても、岩の(上に生える石斛の)種は、残さないことがあるか。ありはしない。

【他出】なし

【考察】

秋の野に生える草木は、根から掘り取ってしまえば持ち去ることができ、その後に再びその草木が生えることもない。しかし、岩に生えた石斛は、岩に根付いているため、根から掘り取ることができず、また、その種を残さないようにして、再び生えないようにすることもできない。「さこく」という植物名を和歌本文には用いることなく、その特徴を野の草木と対照的に詠んだ歌である。

「ねこじにこじて」という表現は、江戸期の「……まなび草ねこじにこじて 植ゑおきて……」(八十浦之玉・九二一・阿刀宿禰長彦)以外、他例は未見であるが、「ねこじに」ならば、「い

にしとしねこじにうゑしわがやどのわかぎのむめははなさきにけり」(和漢朗詠集・上・九三・安倍広庭・梅)、「ねこじにもほらばほらなんをみなへし人におくるるなをばのこさじ」(和泉式部集・四三・秋)といった用例がある。また、「こじて」も、「去年の春い掘(こ)じて植ゑし我がやどの若木の梅は花咲きにけり」(万葉集・巻八・一四二七・一四二三・中納言阿倍広庭卿の歌一首)、「いにし年ねこじてうゑしわがやどのわか木の梅は花さきにけり」(拾遺集・雑春・一〇〇八・中納言安倍広庭・題しらず)などがある。当該歌は、これらの表現を合わせて、根からまるごと掘り起こす意を強調したものであろう。

さて、通常、植物は岩には生えないが、松は例外的に、岩深くに根を張り、生えることがある。「たねしあればいほにも松はおひにけり恋をしこひばあはざらめやは」(古今集・恋一・五一二・読人しらず・題しらず)という歌は、種さえあれば岩に松が生えることがあると詠んだ典型的な歌である。他にも同様の発想で、「たねはあれど逢ふ事かたきいほのうへの松にて年をふるはかひなし」(後撰集・恋四・八〇七・よみ人しらず・ふみつかはしける女のはのはの、こひをしこひばといへりけるが、年ごろへにければつかはしける)、「いはのうへの松にたとへむきみぎみは世にまれらなるたねぞとおもへば」(拾遺集・雑賀・一一六五・左大臣・冷泉院の五六のみこはかまぎ侍りけるころ、

いひおこせて侍りける)、「いはにおふるねのびの松もたねしあればちとせの春はわれにまかせよ」(順集・一六七・大納言源朝臣、大饗のところにとつべき四尺屏風調せしむるうた/子日するところ)といった歌が見える。また、松の他にも、「たねしあればおひにけらしもいはつつじはなさくはるにあはれとやみし」(躬恒集・四二四)のように、岩躑躅を詠んだ歌もあるが、石斛を詠歌の対象にした作は稀である。

なお、「たね」を「のこす」ということは、「かすがののわかなのたねはのこしてむちとせのはるもわれぞつむべき」(伊勢集・二〇四・東三条の宮す所の御賀を中務宮したまふに、屏風に/わかなつみたるころ)という歌からも知れるように、植物が再び芽生えることが期待される。当該歌の下旬は、変わることなく生え続ける石斛のさまの、ひとつの表現と言えよう。

三九二〇(わらび)

【本文】

みよしののやまのかすみを今朝みればわらびのもゆる煙なりけり

【校異】なし

【語釈】○みよしののやま 「み」は美称。吉野山を指す。奈良県中央部の山。桜の名所として知られる。○わらび シダ類

ウラボシ科の落葉多年草。山野の向陽地に生える。早春、先端が拳状に巻いた新葉を出す。早蕨(蕨の若葉)は食用とする。屏風絵にも「わらびをるおんな」(重之集・一三七番詞書)が描かれることがあり、春を告げる身近な植物だったことがわかる。「蕨火」(蕨を燃やしてたく火)を掛ける。○もゆる(蕨の「萌ゆる」に(蕨火の)「燃ゆる」を掛ける。○煙 草木の若芽などが遠くにかすんで煙のように見えるもの。ここでは、山麓に生えた早蕨が、遠くからは煙って見えるさまをいう。蕨火の燃える「煙」を掛ける。

【通釈】

吉野の山の霞を今朝見ると、蕨を燃やす火の煙ならぬ、蕨が萌える煙だったのだ。

【他出】

『夫木和歌抄』卷第三春部三、八九一番

(早蕨)

六六

よみ人しらす

みよしのの山の霞を今朝みればわらびのもゆるけぶりなりけり

【考察】

立春になり、吉野山にも霞が立ったと思ったら、今朝はもう、山麓一带に萌え出た蕨によって煙っているという、春が徐々に

深まっっていく情景を詠んだ歌である。

〔語釈〕でも触れたように、吉野といえは春は桜の名所であり、平安期の和歌において、藤を詠む例は、他に管見に入らない。鎌倉期以後も、「芳野山ちりしく花の下藤さくらにかへてをるも物うし」(壬二集・二二四三・春歌とて)など数例を数えるにとどまる。後世の例は、当該歌の影響下に詠まれたか。

一方、吉野の霞は、桜と同じく吉野の景物として、その組み合わせが定着している。「みよしののやまのかすみ」という表現も、「あさみどりはるをきぬとやみよしののやまのかすみのおびにみゆらん」(忠見集・七〇・みぎがたを、またかすみ)といった歌合の歌に見出すことができる。

「今朝みれば」という句は、『万葉集』には用いられず、勅撰集においても、『後撰集』が初出である。『後撰集』には、「昨日見し花のかほとてけさみればねてこそさらに色まさりけれ」(春下・二二八・三条右大臣・ことふえなどしてあそび、物がたりなどし侍りけるほどに、夜ふけにければまかりとまりて)をはじめ、二首の歌がある。いずれも第三句に置かれ、「今朝」を境に変化した情景や心情を詠んでいる。当該歌においても、立春になり、吉野山に立った霞が、今朝は、遠くに萌え出た藤の若芽に変わっているという、季節の推移に眼目があろう。

「わらび」の歌は、「石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる

春になりけるかも」(万葉集・巻八・一四二二・一四一八・志貴皇子の権びの御歌一首)という早藤を詠んだ志貴皇子の万葉歌が知られている。平安期においても、「さわらびのおひいづるのべをたづぬればみちさへみえずそもかすみて」(能宣集・三五五・はじめのはる、あるところにて、わらびをよみはべりし)といった同趣向の例が散見される。また、応和三年(九六三)『宰相中将君達春秋歌合』には、「あきやまにつまこふしかのこゑよりもみねのわらびはもえぞまされる」(四九・春)、「春のものもゆとかきさしわらびにももえこそまされあきのほたるは」(五〇・あき)、「はかもなきあきのほたるを春のものにもゆるわらびにさらにたとへじ」(八四・わらびのかへし、春の御方)の三首の歌に藤が詠まれており、いわゆる春秋争いにおいて、春の藤が、秋の鹿の声や螢と並べて論じられている点に留意したい。

一方、「煙たちもゆとも見えぬ草のはをたれかわらびとなづけそめけむ」(古今集・物名・四五三・真せいほうし・わらび)といった歌のように、平安期には、「藁火」との掛詞としての用法も見える。また、「さわらびやもえいでぬらむはるののにやけはらあさる人しげくみゆ」(相模集・五三〇・はる)、「さわらびやしたにもゆらんしもがれののばらの煙春めきにけり」(拾遺集・雑秋・一一五四・藤原通頼・東宮の御屏風に、冬野やく所)のように、早春の野焼きの後に早藤が萌え出すという季節感も、当

該歌の背後にはあるように思われる。

三九三三（ひかけ）

【本文】

ひとしれぬ<sup>(こころ)</sup>ころをきみにおくやまのおもひかけてふくさ<sup>(は)</sup>におひけり

【校異】

○おもひかけ―おもかけ（松・羅）おもふひかけ（宮）  
○くさにはほひけり―くさにをひけり（永）草に生けり（松・黒・寛）くさにおひけり（和・林・宮）くさに生けり（羅）草におひけり（田）※今日草には草はの誤（黒）

【語釈】

○ひとしれぬころ 周囲の人々に知られないように、ひそかに抱く恋心。 ○おくやま 「奥山」に「心を君に置く」とを掛ける。日光が差し込まない日陰のイメージから、「日陰の鬢」が連想される。 ○おもひかけてふくさ 「おもひかけ」は、「思ひ掛く」（恋しく思う、懸想する、慕う）の意に「日陰」（日陰の葛）を掛ける。

【通釈】

人に知られないようなひそかな恋心をあなたに抱くと、奥山の「思ひ掛け」（懸想する）という名の日陰の葛という草になって生えたよ。

【他出】なし

【考察】

草の名「日陰」に「思ひ掛く」を掛け、ひそかに恋人を慕う心が、人目のない奥山でひっそりと生える「日陰」という草になって生えたと、忍ぶ恋のつらさを訴えた歌である。

「ひとしれぬころ」の類例は、勅撰集においては、『古今集』に「ひとしれず思ふ心は春霞たちいでてきみがめにも見えなむ」（雑下・九九九・ふちはらのかちおむ・寛平御時歌たてまつりける）という歌が見え、その後、当該歌と同一表現が、「常夏に思ひそめては人しれぬ心の程は色に見えなん」（後撰集・夏・二〇一・よみ人も・題しらず）、「しられじなわがひとしれぬ心もて君を思ひのなかにもゆとは」（同・恋六・一〇一七・よみ人しらず・おなじ所に侍りける人の、思ふ心侍りけれどいはずのびけるを、いかなるをりにかありけん、あたりにかきておとしける）、「ひとしれぬ心の内を見せたらば今までつらき人はあらじな」（拾遺集・恋一・六七二・よみ人しらず・題しらず）といった歌に見られる。また、私家集にも、「ちがへむとゆめおもふなよ人しれぬころはかはじあはせますとも」（能宣集・四二二・又かへし）、「おもひいでのかなしきものは人しれぬ心のうちのわかれなりけり」（重之集・二九・ある人、みやたちにゆめのやうにてやみにけるを、ゆめ人にしらすなど、なくなくくちかためられけるを、うせたまひにければ）、「人

しれぬこころひとつをなげきつつつげのをぐしをさすかひぞなき」(義孝集・二一・五節のころ、さしくしとりたるかへすとて)、「きみがかくいふにつけても人しれぬこころのうち心あるかな」(義孝集・五〇・御返し) 他がある。いずれも内に秘めた心を持って余して悩む状況を詠んでおり、後撰集時代に定型化した表現であろう。

次に、「こころをきみに」という表現に着目すると、「おもへども身をしわけねばめに見えぬ心を君にたぐへてぞやる」(古今集・離別・三七三・いかごのあつゆき・あづまの方へまかりける人によみてつかはしける)、「住の江の浪にはあらねどよとも心に君によせわたるかな」(後撰集・恋二・六三八・つらゆき・こころざしありける女につかはしける) などのように、「たぐへて(ぞ)やる」「よせわたる」といった行為によって、相手への思いを表現する例がある。当該歌では、「奥山」との掛詞で(心を君に)「置く」と表現されるが、懸想する意の「心を置く」という表現は、『古今集』に「立帰りあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつ白浪」(恋一・四七四・在原元方・題しらず)、「露ならぬ心を花におきそめて風吹くごとに物思ひぞつく」(恋二・五八九・つらゆき・やよひばかりに物のたうびける人のもとに又人まかりつつせうそこすとききてつかはしける) といった例を見出す。

「おもひか(く)」という語は、「秋の野によるもやねなんをみなへし花の名をのみ思ひかけつつ」(後撰集・秋中・三四五・よみ人しらず・題しらず)、「はつかにも思ひかけてはゆふだすきかもの川浪立ちよらじやは」(順集・一五・夏) といった歌に見出されるが、植物「日陰」との掛詞で用いられた例は、当該歌以外、管見に入らない。

なお、結句は、底本「くさにはひけり」であり、仮名遣いを尊重すれば「草匂ひけり」と解することになる。だが、日陰の蔓が和歌においてその匂いに着目されることはまずなく、また、多くの他本が「草に生ひけり」としている点を考慮し、本稿では底本を校訂した。

三九五〇(ささ)

#### 【本文】

たまざさのはわき(を)におけるしらつゆの今いくよへん我ならなく

【校異】○たまさ、の―玉□の(羅) ○はわき―はわけ(永) 葉分(松・田) は分(羅) はわきすネイ(黒・寛) ○いくよ―いく夜(永) いく世(松・和・羅・宮・田・黒・寛)

【語釈】○たまざさ 美しい笹。美称「たま」を付すことで、「しらつゆ」と縁語となる。 ○はわき 葉と葉との間を分けるこ

と。葉ごとに分けること。また、一枚一枚の葉。「葉分け」に同じ。

【通釈】

玉笹の葉ごとに置く白露のように、あと幾夜も過ごせそうな私ではないのに。

【他出】

『和歌童蒙抄』第七草部、五九八番

(竹)

たまざさのはわけにむすぶしらつゆのいまいくよへむわが  
みならなくに

【考察】

笹に置く白露という美しい色彩のコントラストを背景に、すぐに消えてしまうはかない露に、自分自身を重ね合わせた歌である。

「たまざさ」は、『古今集』『後撰集』には用例がなく、『拾遺集』で初めて、「わが駒ははやくゆかなんあさひこがやへさすをかのたまざさのうへに」(拾遺集・神楽歌・五八四)と、『万葉集』の異伝歌の計二首を見出す。私家集において注目すべきは『中務集』である。「みればなほのべにかれせぬたまざさのはわさのつゆはいつもたえせじ」(一二七)、「きえぬまをうきことにするたまざさのつゆはかげまつほどぞひさしき」(一二八)とい

う贈答歌が見えるが、一二七番の詞書に、「中宮の御さうしかか  
せたまひけるに、たまざさのはわきにやどる露ばかりとあるう  
たをかきて、まゐらせたりければ、宮より」とあり、その「た  
まざさのはわきにやどる露ばかり」という歌が、当該歌の上句  
に酷似している。まったく同じ歌句ではないものの、当該歌と  
見做される歌が、中務と中宮(藤原安子)との間で採り上げら  
れる程度には人口に膾炙していたらしいことを示す例である。  
なお、「たまざさ」の「つゆ」を詠んだ十世紀までの例は、『古  
今六帖』の当該歌と『中務集』の贈答歌以外、未だ管見に入ら  
ない。

さて、『中務集』一二七番歌は、当該歌の歌句を用いて、「た  
まざさのはわき」と「つゆ」を詠んでいると見られるが、「はわ  
き」の「つゆ」ならば、他にも、「いかにしてたまにもぬかむゆ  
ふさればをぎのはわきにむすぶ白つゆ」(後拾遺集・秋上・  
三〇七・橘為義朝臣・寛和元年八月七日内裏歌合によみはべり  
ける)、「おきてみる菊のはわきの露の上に金のなみのかげぞう  
つれる」(赤染衛門集・一五五・同じ題〈菊〉を人にかはりて)  
といった例がある。

「今いくよ」の用例は意外と少ない。平安中期には、「あさご  
とにはらふちりだにあるものをいまいくよとてたゆむなるら  
ん」(拾遺集・哀傷・一三四一・おこなひし侍りける人の、くる

しくおほえ侍りければ、えおき侍らざりける夜のゆめに、をか  
しげなるほふしのつきおどろかしてよみ侍りける」という歌を  
かろうじて見出せる程度である。

結句「我ならなくに」は、『万葉集』においては、西本願寺本  
に見られる訓であり、現代の新訓とは異なる。また、『古今集』  
『後撰集』には用例が存するが、以後の勅撰集には、『風雅集』  
の一例を除き、まず見られない表現である。主として古今・後  
撰時代の表現と捉えられよう。

三九五―(あふひ)

【本文】

千はやぶる神のうづきになりにけりいざうちむれてあふひか  
ざさん

【校異】なし

【語釈】○千はやぶる 「神」に付く枕詞。 ○うづき 陰暦四

月の異称。十一月とともに神事が行われる月とされた。 ○う  
ちむれて 「うちむる(打群)」は、大勢集まる、連れ立つの意。

【うち】は接頭辞。 ○あふひかざさん 「あふひ(葵)」は、賀  
茂神社の葵祭の神事に用いる。飾りとして髪や冠の巾子(こじ)  
の根に挿す。

【通釈】

神祭りをする四月になった。さあ、連れ立って、葵を頭に挿し  
て飾りにしよう。

【他出】

『新勅撰和歌集』卷第三夏歌、一四一番

題しらず

よみびとしらず

ちはやぶるかものう月になりにけりいざうちむれてあふひ  
かざさむ

『歌枕名寄』卷第一、賀茂篇、六七番

(賀茂社)

新勅三

同(読人不知)

ちはやぶるかもの卯月になりにけりいざうちむれてあふひ  
かざさむ

【考察】

かねてから賀茂神社の葵祭を待望していたが、やっと祭りが  
催される四月になった。さあ、みなで葵を挿頭にして繰り出そ  
う、という生き生きとした心情を詠んだ歌である。後に『新勅  
撰集』と、それを継承した『歌枕名寄』では、当該歌の第二句  
を「かものう月に」として再録するが、「賀茂」とするのは、葵  
を挿頭にすることで特定される、賀茂神社の葵祭りであること  
を、特に表出した異文と見られる。

そもそも「うづき」は、神祭りの月である。「百とせのうづき

をいのる心をばかみながらみなしりませるらん」(貫之集・五三七・かみまつる家)、「神まつる卯月にさける卯花をしるくもきねがしらげたるかな」(書陵部藏御所本〈五一〇・一二〉)躬恒集・三六九・延喜御時御屏風に)、「さかきとるうづきになりぬかみやまのならばがしはもとつはもあらじ」(好忠集・九五・四月はじめ)、「神まつるうづきならばほととぎすゆふかけてやはなきてわたらぬ」(道命阿闍梨集・二五三・四月ゆふぐれに郭公まつとて)などの歌が散見される。とくに貫之・躬恒歌は屏風歌であり、屏風絵の図柄としても定着していたことがわかる。このうち躬恒歌は、後に『拾遺集』に採られ、「うづき」の「かみ」を詠む歌として、勅撰集初出となった。

「いざうちむれて」という表現は、用例数こそ少ないが、「しらゆきのまだふるさとのかすがのにいざうちむれてわかなつみてむ」(能宣集・七一・わかな)という歌がある。『能宣集』の配列から、歌合の歌であることも知られ、みなで若菜を摘みに行く情景が、詠歌の題材のひとつとして捉えられていることがわかる。また、「うちむれて」という句ならば、「おもふどち春の山辺にうちむれてそこもいはぬたびねしてしか」(古今集・春下・一二六・そせい・春の歌とてよめる)、「うちむれていざわぎもこががみ山こえてもみちのちらんかげ見む」(後撰集・秋下・四〇五・つらゆき・題しらず)、「きみをのみのりのりおきて

はうちむれてたちかへりなんかものはなみ」(中務集・三八・村上上の先帝の御屏風のゑに、／四月みあれひく)、「わらびおふるやたのひろののうちむれてをりくらしつつかへるさと人」(好忠集・六五・くれの春、三月上)、「うちむれて掘るに嵯峨野のをみなへし露もこころをおかでひかれよ」(落窪物語・五八)などを列挙することができる。春や秋という待望の季節を迎え、それぞれの風物をみなどで満喫しようという思いが込められた表現であるが、とくに『中務集』歌は、四月の賀茂神社の葵祭の前儀、御阿礼祭(御生祭)を採り上げている点で、当該歌と時期や場面が共通する。また、当時の風俗が題材となる屏風歌である点にも、留意したい。

なお、「あふひ」を「かざす」という表現は、「なきわぶるなつをもまたずあふひをば時ならずともかざしてしかな」(敦忠集・八九・かへし)、「人もみなかつらかざしてちはやぶる神のみあれにあふひなりけり」(貫之集・一三〇・車にのれる人かにもまうづ)、「ちはやぶるかものあふひをいのりつつかざして君をたのみけるかな」(信明集・五四・またをとこのかへりて)、「今年よりつむべきものかはやぶるかものまつりにかざすあふひは」(宇津保物語・まつりのつかひ・二二五・東宮)、「ひき連れて葵かざししそのかみを思へばつらし賀茂のみづがき」(源氏物語・須磨・一八〇・右近将監)など、平安中期の私家集や



物語中の和歌に見出せる。

三九五二（あふひ）

【本文】

おもふなかさけにゑひにし我なればあふひならではやむくすりなし

【校異】 ○おもふなか―おもふなら（和・宮）

【語釈】 ○おもふなか 男女間の相思相愛の仲。 ○さけにゑひにし我 酒に酔ってしまった私。理性や分別を失ってしまった状態を比喩的に表現した。 ○あふひ 「逢ふ日」と「葵」とを掛ける。葵は薬用になる。

【通釈】

恋人同士、相思相愛の仲で、酒に酔ったように分別をなくした私なので、葵（逢う日）でなくては、恋の病が治まる薬はない。

【他出】

『和歌童蒙抄』第五技芸部、四二八番

飲食部 酒

おもふなかさけにゑひにしわがなかはあふひならではやむくすりなし

【考察】

相思相愛で恋人に夢中になってしまったために、酒に酔った

ように物事の分別もできなくなってしまい、薬用の「葵」に掛けて、恋人に「逢ふ日」でなくては恋心が収められないと、恋人を思う情熱を詠んだ歌である。下句は、「我こそや見ぬ人こふるやまひすれあふ日ならではやむくすりなし」（拾遺集・恋一・六六五・よみ人しらず・題しらず）と同一であるが、この『拾遺集』歌は、まだ逢ったこともない人への恋心を詠んでいる。当該歌の下句は、「葵」が薬であることから、これと同音の「逢ふ日」が恋心を抑える何よりの薬だという機知が主眼であり、上句にさまざまな恋の状況を据えることが可能な句と言えよう。

平安朝の和歌においては、相思相愛を手放して喜ぶ状況が詠まれることは稀であるが、「おもふなか」を詠んだ歌の中には、「あまのはらふみとどろかしなる神も思ふなかをばさくるものかは」（古今集・恋四・七〇一・よみ人しらず・題しらず）という歌も存する。だが、多くの場合は、「もゆれどもしるしだになき富士のねに思ふ中をばたとへざらん」（貫之集・五六七・恋）、「月かけはいづこよりかはもりつらんおもふなかにはひまもあらじを」（能宣集・四一七・人とふして侍るに、月のもりたれば）、「くさのはもうごかぬなつのでる日にもおもふ中にはかぜぞふさける」（重之集・二五四・夏廿）といった歌のように、「おもふなか」に亀裂が入ることを予感したり、「おもふなか」ではなかったことを自覚したりという状況が詠まれる。

また、酒に酔った状況を詠んだ歌は、『万葉集』に、「焼大刀のかど打ち放ちますらをの寿(ほ)く豊御酒に我多ひにけり」(万葉集・巻六・九九四・九八九・湯原王の打酒の歌一首)という歌がある他、平安期に入っても、「はるばるとあひておいぬる身なればや多ひにのみだのあかれざるらん」(赤人集・一三二)、「多ひにけるわれらはしらずあやもなしたがかつけたるつみにか有りてん」(兼盛集・一二三・まつりのつかひのたつ所、つかひまひ人べいじゆうなどに中将かはらけとりて物かづく)、「はるばるにあひておいぬる身なればや多ひに涙のあかれざるらむ」(千里集・一八・翁易酒悲)、「たをさして多ひにけらしな五月雨にたちるみだれてなくほととぎす」(安法法師集・四五・ほととぎすまつ、なくをききて)などがある。老い泣きとともに詠まれることもあるが、当該歌では、恋心により分別をなくした状態を、酒に酔ったと比喩的に表現したところに眼目がある。

なお、和泉式部の「くすりてふあふひもすぎぬ今はただこひわすれじとひとともがな」(和泉式部集・五六〇・また)は、当該歌を踏まえて詠まれた歌であろう。

#### 附記

本稿は、京都女子大学における二〇一一年度の授業(講読中古A・講読中古B)において採り上げた内容の一部である。受講生のうち、丸井しずか(三八九五番)、池田みゆき(三九一二番)、鈴木香里

(三九三三番)、山本美月(三九五〇番)が、それぞれの担当歌についてレポートを執筆した。その後、これをもとに、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」(同志社大学人文科学研究所第18期研究会第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究(C) 課題番号253330403、いずれも平成25(27年度)の一環として、さらに検討を加えた。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2とともに、竹田正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)作成の文字列解析器「e-GSA Ver.200」を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・島原図書館島原松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げる。

『古今和歌六帖』別出歌一覽 —第六帖、3894〜3952番—

- 3894 あさがほ  
 かが野ののべのあさがほおも影にみえつついもはわすれかね  
 つも (やかもち)
- 3895 2-1万葉1634 「たかまとの」「のへのかほばな」、3-15伊勢集  
 413 「なかのあさがほ」「みえつついまも」「わすられなくに」  
 おぼつかなたれとかしらん秋霧の絶間にみゆるあさがほのはな  
 〈未詳〉 2-6和漢朗293 「あさぎりの」
- 3896 あさがほはあさ露おきてさくといへど夕かげにこそさきまさり  
 けれ
- 3897 2-1万葉2108 「あさつゆおひて」、3-1人丸97 「あさがほの」  
 「夕がほにこそ」「にほひましけれ」  
 このやまのもとにもあらじあさがほのはなをのみみて我やかへ  
 らん (つらゆき)
- 3898 3-19貫之210 「此やどの」「人にもあはで」  
 あさぢ  
 あさぢふのをのしのはらしのぶともいまはしらじなとふ人な  
 しに (人丸)
- 3899 1-1古今505 「人しるらめや」「いふ人なしに」、2-3新撰和  
 326 「人しるらめや」「いふひとなしに」  
 けさなきてゆきしかりがねさむみかも此比あさぢいろづきにけ  
 り (むらまつ)
- 2-1万葉1582 「こののあさぢ」「いろづきにける」
- 3900 今朝のあさけ秋風さむくききしなへのべのあさぢはいろづきに  
 けり (あめのみかど)
- 3901 2-1万葉1544 「かりがねさむく」「のへのあさぢぞ」「いろづき  
 にける」  
 やまたかみ夕日がくれのあさぢ原のちみんためとしめゆはまし  
 を
- 3902 3-1人丸26 「後みんために」、1-3拾遺集546 「ゆふ日かくれ  
 ぬ」「後見むために」、2-1万葉1346 「ゆふひかくりぬ」「のちみ  
 むために」  
 おもふよりいかにせよとか秋風になびくあさぢのいることにな  
 る
- 3903 1-1古今725、2-3新撰和269  
 しぐれのみまなくしふればかすがのあさぢの色もうつろひに  
 けり  
 〈未詳〉
- 3904 秋はぎは咲きぬべからし我がやどのあさぢが花のいろづくみれ  
 ば (ほづみの王子)
- 3905 2-1万葉1518 「さくべくあらし」「ちりゆくみれば」  
 まくずはふをのあさぢをこころより人ひかめやもわれならな  
 く  
 2-1万葉2846 「こころゆも」「あがなけなくに」
- 3906 つばな  
 君がためわがてもすまにはるののにぬけるつばなぞくひてこえ  
 ませ

- 3912  
あかねさすひるはうちたしあぢさゐのはなのよひらにあひみて  
しかな  
2-1万葉4472 「やつよにを」
- 3911  
あぢさゐのやへさくごとくやへよにもいませ我がせこみつし  
のぼん  
あぢさゐ  
2-1万葉4472 「やつよにを」
- 3910  
かたをかに日のはるばるにみえつるはこのもかのもに誰かつげ  
けん  
5-7字多合17 「ひのはなばなに」 「たれかつげつる」
- 3909  
わたつうみのおきなかにひのはなれいでもゆとみゆるはあま  
のいさり火  
かにひ  
1-3拾遺集358 「あまのいさりか」、1-3拾遺抄483 「あまつ星  
かも」、5-7字多合18 「あまつほしかも」
- 3908  
つばなつむあさぢが原のつぼすみれいまさかりなりわがこふら  
くは  
2-1万葉1453 「つばなぬく」、3-3家持39 「つばなぬく」「い  
まさかりにも」 「しげきわがこひ」
- 3907  
我が君にけぬはこふらしたまひたるつばなをくへどいややせに  
やす  
2-1万葉1464 「わけがため」 「めしてこえませ」
- 3919  
かすが野にけぶりたつみゆをとめごしはるののおはぎつみてく  
るらし  
2-1万葉1448
- 3918  
山ぶきのさきたる野べのつぼすみれ此はるさめにさかりなりけ  
り  
1-2後撰89
- 3917  
我がやどにすみれのはなのおほかればきやどる人やあるとまつ  
かな  
2-1万葉1428、3-2赤人163
- 3916  
はるののにすみれつみにとこしわれぞ野をなつかしみひとよね  
にける  
すみれ  
2-1万葉1428、3-2赤人163
- 3915  
秋野はねこじにこじてもぬともいはほのたねはのこしやはせ  
ぬ  
5-7字多合20 「しべゆるぶらし」 「春のくさ」  
ぬ  
〈未詳〉
- 3914  
はるさめにしめぞゆふらし花にさこくのはなへてさきみちにけ  
り  
5-7字多合19 「はるきては」 「なべてけさこく」
- 3913  
春はきてきのふばかりをあさみどりいろは今朝こく野は成りに  
けり  
さこく  
5-7字多合19 「はるきては」 「なべてけさこく」

2-1万葉 1883 「をとめらし」「はるののうはぎ」「つみてにらしも」

わらび

3920 みよしののやまのかすみを今朝みればわらびのもゆる煙なりけり

〈未詳〉

3921 わがためになげきこるともしらなくなににわらびをたきてつけまし

3-15伊勢集 466

3922 けぶりたちもゆともみえぬくさのはをたれかわらびとなづけ初めけん

1-1古今 453

ゑぐ

3923 あしひきの山田のさはにゑぐつむとゆきげの水にもすそぬらす

2-1万葉 1843 「きみがため」「ものすそぬれぬ」、3-2赤人 138

「きみがため」「もすそぬらしつ」、3-3家持 61 「きみがため」「もすそぬらしつ」

3924 あしひきのやまさはゑぐをとにもいかんひだにもあはんおやはせむとも

2-1万葉 2770 「つみにゆかむ」「ひだにもあはせ」「はははせむとも」

ゆり

3925 なつの野のしげみにさけるひめゆりのしられぬこひはくるしかりけり

2-1万葉 1504 「しらえぬこひは」「くるしきものぞ」

3926 みちのべのくさふかゆりのちにてふ今てふことをわれはしらめや

2-1万葉 2471 「ゆりもといふ」「いもがいのちを」「われしらめやも」

3927 みちの辺のくさふかゆりのはなゆゑにゑみせしからにつまといはましや

2-1万葉 1261 「はなゑみに」「ゑみしがからに」「つまといふべしや」

あゐ

3928 人しれずこひはしぬともみそのふのからゐのはなの色にいでめや

2-1万葉 2794 「こもりには」「こひてしぬとも」「いろにいでめやも」

まさきかづら

3929 すべらぎの神のみや人まさきづらいやとらしきに我帰りみん

2-1万葉 1137 「すめろきの」「ところづら」「いやとこしくに」「ひかげ

3930 あしひきのやました日影かづらけるうへにやさらにむめをしの

- 3937 2-1万葉 4495 「ゆきにあへてる」「つとにつみこな」  
あしひきの山たちばなのいろにいでて我がこひなんをやめん方  
なし
- 3936 1-1古今 668、2-3新撰和 238、3-11友則 32  
けのこりの雪にあひたるあしひきのやまたちばなをつとにつめ  
らな
- 3935 わが恋をしのびかねてはあしひきの山たちばなの色に出でぬべ  
し(とものり)  
やまたちばな
- 3934 朝日影にほへるやまに照る月のうつくしつまを山ごしにおきて  
2-1万葉 498 「あかざるきみを」、3-4猿丸 14 「よそなるきみ  
を」「わがままにして」
- 3933 ひとしれぬころをきみにおくやまのおもひかけてふくさにお  
ひけり  
〈未詳〉
- 3932 「はなのまがふに」  
5-4寛平后 145 「花のまがふに」、2-2新撰万 406 「をとめらが」  
れ  
ときはなるひかげのかづらけふしこそ心のいろにふかく見えけ
- 3931 2-1万葉 4302  
をとめごが日かげのうへにふる雪ははなのかざしにいづれたが  
へり  
ばん
- 3943 大宮のみかさぬへるありますげありつつみれどことなきわぎ  
もこ  
は「かたもひぞする」
- 3942 2-1万葉 2476 「みわたしの」「みむろのやまの」「ねもころわれ  
する  
みわたせばみもろの山のいはほすげしのびに我はかたおもひぞ  
する
- 3941 2-1万葉 2474 「みなとに」「さねばふこすげ」「ぬすまはず」「き  
みにこひつつ」「ありかてぬかも」  
ともしほのねにねざすこすげのしのびずて君にこひずてあはでへむ  
こと」
- 3940 2-1万葉 583 「ねもころみまく」「ほしききみかも」  
をみなへしさく野におふるしらすげのしらぬこともていはれし  
わがせ  
2-1万葉 1909 「さきのおふる」「しらつつじ」「しらぬことも  
ち」「いはえしわがせ」
- 3939 2-1万葉 2848 「あまなくに」「みだりてむとや」  
あしひきの山におひたるすがのねのねんごろみまくほしき君か  
な
- 3938 2-1万葉 2777 「あはこひなむを」「ひとめかたみすな」  
すげ  
みよしののみくまがすげをあまゐるにかりのみかりてみだれな  
んとや

- 3949 ささの葉もさえつるなへにあしひきの山には雪ぞふりつみにける  
ささ  
 3-19 貫之216 「篠の葉の」「ふりまさりける」
- 3948 ひ  
 2-1 1万葉 1254 「すがのみつみに」「ゆきしわれ」「やまちにまと  
 ひ」  
 みな人のかさにぬふてふありますげ有りての後もあはざらめや  
 は  
 1-3 拾遺集 858 「あはんとぞ思ふ」、3-1 1人丸 200 「あはんとぞ  
 思ふ」、2-1 1万葉 3078 「ひとみななの」「ありてのちにも」「あはむ  
 とぞおもふ」
- 3947 しつ  
 2-1 1万葉 794 「ねもころわれも」「あひおもはずあれや」  
 いもがためすがのみとると行く我はやま路まよひてこのひくら  
 しつ
- 3946 ざらんや  
 2-1 1万葉 2771 「あがおもひづまは」  
 おく山のいはかげにおふるすがのねのねんごろ我もあひおもは  
 ざらんや
- 3945 ひづまは  
 おくやまのいはもとすげのねふかくもおもほゆるかも我がおも  
 ひづまは
- 3944 えぬかも  
 2-1 1万葉 2768 「ねもころいもに」「こふるにし」「ますらをごこ  
 ろ」  
 2-1 1万葉 2767 「おほきみの」「ことなきわざも」  
 すがのねのねんごろいもにこひんかもうらおもふこころおもほ  
 えぬかも
- 3952 おもふなかさけに糸ひにし我なればあふひならではやむくすり  
 なし  
 〈未詳〉
- 3951 千はやぶる神のうづきになりにけりいざうちむれてあふひかさ  
 さん  
 あふひ  
 〈未詳〉
- 3950 たまざさのはわきにおけるしらつゆの今いくよへん我ならなく  
 に  
 〈未詳〉